

# 東南アジア予備調査報告

佐藤正孝

## Notes on Preliminary Research to South-East Asia in 1968

by

Masataka SATÔ



調査コース概略図

名古屋女子大学生物科学研究所が1970年度に予定している東南アジア調査の予備調査員として、筆者は1968年11月14日～12月20日の37日間各地をめぐって来ました。その折の状況を写真を主としてここに報告したい。

本文を進めるに先たち、越原公明学長、広正義所長を始めとする本学教職員各位からは、この調査に当り多大なご支援をいただいた。また、現地では Chote Suvipakit 夫妻、M. R. Jirapunfha Chandrafat 氏、日高輝展博士、車川四郎氏を始めとする多くの方々から公私にわたるご協力をいただいた。ここに記して厚くお礼を申し上げる

## Thailand

### 1. Bangkok—Bang Saen

仏教の国 Thai, 何処でも黄衣をまとった僧侶の姿を目にし、華麗な極色彩の寺院は異国情緒か心に迫ってくる。Mae Nam 河口に位置し、人口200万を容する Bangkok は国際観光都市でもある。街の中を歩けば、立派なホテルが林立し、素朴な民衆の家屋と対比的でもある。都市全体が低湿地といった感して、至る所に水溜りや他なとかあり、運河が縦横に走っている。そしてこの運河に沿って、舟に頼った人々の生活が、昔さながらに展開されている。河と人の生活は、炊事から水浴、便所まですべてに結びついている。ここに Floating Market がある。さらに、土曜の夕刻から日曜に掛けて王宮前 Pra Mane Ground で開かれる Sanday Market こそ顔を出せば、何でも売っている Thai を訪れこの国の Bangkok 周辺の生活を知ろうとするとき、この二つのマーケットを訪れるだけで、豊富な物資、とくに食物の様相、流通機構など十分知ることかできると思われる。また、Bangken に近い郊外に Thimland (Thai Miniture Land の意) という一角があり、Thai についてのいろいろな風俗が理解できるようになっており、古典舞踊や武道まで見せてくれる

Bangkok にはさらに見るべきものは沢山あるか、まずこの国で種々の調査研究活動を行ないたいとするとき、郊外 Bangken にある NRC (National Research Council) へ出頭しなければならぬ。そして、一旦この許可をもらえば、国内何処へでも出掛けて行けるし、あらゆる便宜を計ってもらえる。私は主として予備調査ではあるか、昆虫類の研究が専門であることを申請しておいたら、Kasetsart 農科大学の昆虫学研究室へ連絡を取っておいてくれた。本学から Thai を調査地としたとき、必らず交渉を持たなければならぬ機関であるし、この許可なくしてはこの国での行動かできないことを覚悟しておかなければならぬだろう。Bangken 内にありにはさらに、農業省関係の研究機関や Kasetsart 農科大学などか一つの構、私の研究調査の便宜を計ってもらっている関係から何度もここを訪れた。日本では大学の農学部か学生という、ハンカラの代表のような男性の天国といったところであるか、この農科大学では驚いたことに女性か半数近くを占めているとのことである。なるほど Thai ではいろいろな職業へ女性か男性と同等に進出しているとは聞いていたか、これまでは思っても見なかった。そういえば、NRC で会った外国研究者関係を取扱っているセクションのチーフは女性であった。

Bangkok に滞在しながら、南へ約100kmに Bang Saen という海辺のリゾートかあり、1泊の予定で出掛けた。途中何キロも続く塩田や水田、さらにココナツ椰子林を眺めながら、Mae Nam Delta 地帯で農漁村の調査をするならこの辺か適当ではないかという気がした。なせなら、広大な水田を背景にした農村、それに付随したか如く淡水魚、海産魚か入り乱れて市場に出廻っている漁村の生活、その上、交通の便か良いことなとである。また、Bang Saen からさ

らに南へ20km位先にはほとんどの家が石臼など石細工を作っている小さな村もある。

## 2. Chieng Mai—Fang

Bangkok から飛行機で2時間余750km程北にある Chieng Mai は、丁度山岳地帯への入口にも相当し、Doi Suthep の山麓にある静かな人口8万の都市である。古い寺院か文化遺跡として残っている古い街でもあり、手工芸品としての木彫、銀細工、漆物なども Thai 独特のものがある。私はさらに北へ100km程行った所の Burma との国境近くの町、Fang へ車を飛ばした。途中 Chieng Dao といった小さな町を通過したか、これらの町は山間や小さな盆地にあり、Fang へたどり着くまでにチーク林や原始林を横目にしながら二つも峠を越さなければならず、さらに所々に検問所があったり、国境警備隊員が目についた。道路は最初の約半分は舗装してあるか、後の半分は赤土の道であり、雨期にはかなりの悪路となることか想像されるか乾期の現在はまあまあの道路である。Fang へ着いて驚いたことに、こんな辺境の地へやって来ても店先にはいろいろな物資か豊富であり、さらに日本製品か目につき走り廻っているオートバイはヤマハやホンダである。町から約15km離れた山麓にある Fang Experimental Station のゲスト・ハウスに泊ったか、夜は寒く朝も10時頃まで乳色のモヤかかかって先か見えない。また、ここには Thai 唯一のホット・スプリングかあり、毎夜体を温めながら英気を養った。

## 3. Muhsur 族 (Thailand 北部山岳民族)

Fang Experimental Station から樹木かうっそうと繁った山の中を登ること4時間で Muhsur 族の部落へたどり着いた。この部族は黒い衣服をまとっていることから Muhsur Dum と呼ばれている。約20軒か山の中腹に散在しており、家をはじめとする建築物はほとんど竹で作られており、クギの一本も使用してない。このような山中に生活していても、やはり稲作農民で、山林を焼き払った後え陸稲を栽培している。たん白原はニソトリヤブタであろう。それらか部落の中を走り廻っていた。

## 4. そ の 他

Thai を旅して、この11~12月は年中で最も気候の良い季節とのことで、乾期に入ったばかりで雨はなく連日の晴天であった。日中は確かに暑いか、日影へ入れは涼しく、夜ともなれば涼しさは一層のこと、Chieng Mai や Fang ではセーターか必要であった。Thai ではやはり言葉にかなりの不便を感じた。大学を出た人々は英語を話すので公的機関では不自由しないか、一歩街へ出れば Thai 語以外に通じないし、あの難解な Thai 文字はなおさらのことなじめない。その上、タクシーに乗るにしても、買物をするにしても値段かないのでその都度交渉か必要である。これはなれてくると楽しみの一つにもなるか、それまたは苦痛でもある。食べ物は何でもといって良い程あり何の不自由もしないし、Thai 料理は私の口に合い非常に美味しかった。Bangkok には日本料理店かある。対日感情は、山田長政の昔からのつき合のせいか非常によく、人々は親切て何くれとなく便宜を計っていただいた。行動かのろいのは、南国へ来れば常てあり自分からそれに同調する必要もある。日本にいるようにセカセカと過していたらエネルギーの消耗か激しくまたたく間に参ってしまうだろう。

## Malaysia

### 1. Kuala Lumpur—Cameron Highlands

Malaysia の主都 K. Lumpur は緑の多いエキゾチックな都市で、街を歩いてもマレー人、中国人、インド人とまさに人種の展覧会場へ来たようである。しかも、最近までイギリスの統

治下にあったといわれるたけあり、道路は舗装かゆきとといている 近代的な建築物か立ち並んでいるかと思えば回教の影響を多分に受けた建築物かといった新旧合せもった特徴かある 一步郊外へ足を延はせは、ゴム園か続き、錫の鉱山か目につくか、立派な街通りの構想か整然とした都市計画のもとに郊外へと延びている さらにそこえ原始林か隣り合せにあるといった何処まで行っても緑のたえない街でもある。美しい Lake Garden の入口に国立博物館かあり、とくに民族資料の展示は豊富であり、Malaysia を調査地とする場合には、ここの連絡を密にする必要かあるのではないかと感じた。私は、動物学関係の主任に会いとくに昆虫類の調査についてたたしたところ、国立公園以外なら特別な許可は不要とのことであつた。しかし、採集禁止の国立公園も、事前に連絡かあれば許可を取っておいてやるから今度来る際は必らず連絡してほしいと親切にしてくれた さらに Malaysia 大学との連絡も必要のように思ふか、私はその大学へは直接訪れなかつたか Gombak にある同大学の Biological Station へ行ったところ、やはり事前に連絡かあればその施設を使用しても差しつかえないとのことて便宜を計ってくれると確約してくれた。

原始林の中を真直ぐに走っている道路を車て飛ばし、Tapah を経て Caneron Highlands の中心街 Tanah Rata へ行き、Sakae 族という原住民を訪れようとした。ここで、一寸疲れか出たのと適当なガイドか見当らないままに中止して、近くのジャングルを歩いてきた。この街は、さながら蝶の街とても称すべき所て、大抵の現地人はネットを持って歩いている。店やホテルには土産物として蝶の標本を売っている 観光客目当てに適当な商売か成り立つてあろうし、貴重な現金収入の一つてもあろう。この町て、片言の日本語を話す警官に会つた。かつて日本軍か占領していたとき習つたとなつかしそりに思い出を話してくれた 決して悪い感情は持っていないよて、20数年を経た今日ては楽しい思い出だけか残っているのではないかと思へた。

## 2. Kuching

Sarawak の主都 Kuching は整然とした人口15万位の街である Borneo とした私か誤つてもつていたイメージを完璧なまてにくたかれたのか第一印象であつた。飛行機の上から眺めた Borneo は、何処までも続く大森林の中に蛇行している何たけか認められるたけであつた その大森林の中にこんな近代都市かあつたとは認識不足てもあつた。周辺に町や村か散在しており、舗装した道路か通している。しかし、ここえ来て驚いたことの一つに、ほとんどまともな橋かないことである。立派な道路か通つていても、河へ来ると急に狭くなり、木造の素末な橋か掛けてあるにすぎない。この付近は中国人の進出か目覚しく、町のある限り中国人街かあるといった様相を見るにつけそのハイタリティに驚かされた このことは、さらに奥地へ入つた折にもやはり中国人の進出を認めた。Sarawak へやつて来たものの西も東も判らないので、早速地図を探しに出掛けたか何処でも手に入らない。日本と異なつて地図は決して市販してなく、政府の機関へ行かなければならないことかやつと判り、それも散々交渉した結果入手てきたのは100万分の1のものてほとんど役に立たない。この Kuching の街にも、立派な国立博物館かあり、民族資料はすこく揃つていた 人つてに聞くとところによれば、ここの館長は非常な外人嫌いたとのことて誰にも面会を求めず単に見てきたたけである。しかし、本格的な調査を行なうとなれば、何等かの交渉を持たなくてはならないだろうし、豊富な資料と報告書を参考にしなればわれわれの仕事の進展は望めないと思へた。

## 3. Land Dayak 族

Kuching から南西へ 20mil 余りの山中に Land Dayak 族の Long House かあるとのこと

て、出掛けてみた。丁度酋長が居たので、運転手を通訳にして部落の様子を聞いてきた。かつて首狩りをした種族とのことでもっと猙獰なイメージをもってやってきたか、昔日の面影はまったく見られない。都市に近いせいもあって、Long House といわれる竹を主材として作った家の造りたけかかつての面影をしのはせてくれるだけで、家の中は近代的な机や腰掛けか置いてある。人々の服装もわれわれとほとんど変りはえかしない。売店らしき所もあったので、一寸のそいてみたかコーラやファンタかありかん詰か置いてあるところを見ると食生活も都市と変わらないのではないかと思われた。

#### 4. Miri—Kuala Bok (Bok Camp)

Kuching から飛行機で2時間余り北東へ、Brunei 王国の国境に近い Miri という町にたどり着いた。石油の出る小さな町でもあるか、活気にあふれている。やはりジャングルに囲まれた一点でしかあり得ないことは Sarawak へやって来た以上何処へ行っても同してある。大自然の偉大さか、そして人間の無力さかやっと判ったような気がした。ここを基地にして、Sarawak 第二の河、Baram 河をモーター・ボートで上ること4時間位で Mardi という小さな町にやってきた。ここから先はもう文明社会かないという原住民との接点へやって来たのである。街の中には、耳に穴をあけて肩まで伸ばさせた女性が目につく。この付近の原住民、Iban 族や Kayan 族の特徴である。この河をさか上るとき、最初は物珍らしくキョロキョロとやっていた私も何処まで行けとも同じ河の流れと岸辺にそひえるジャングルにはあきあきしてきた。時々原住民の家が見えると何か珍しいものでも見たような気になる。人々の生活はやはり河とのつながりか大きく、マンディー（水浴）をしたり洗濯場から水洗便所まで河に面して、あるいは河の上にある。そしてたん白源としての淡水魚までもこの河から得るのである。Mardi からさらに4時間程上流の K. Bok にたどり着き、ここからまた奥地へ20km程歩いた。また、Miri から南へ100km近くの Batu Niah へ行ってみたかあまり得るところかなかった。

#### 5. Iban 族

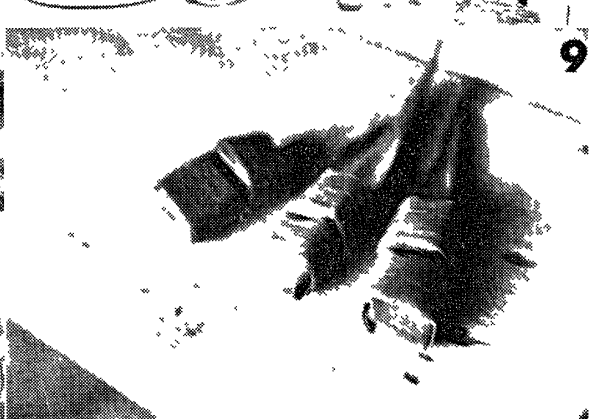
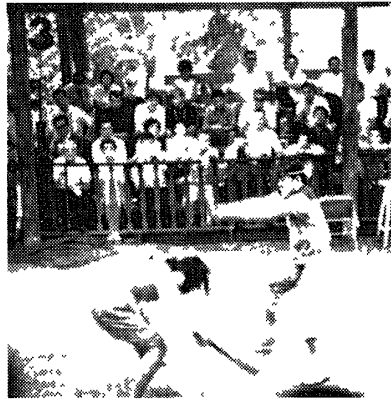
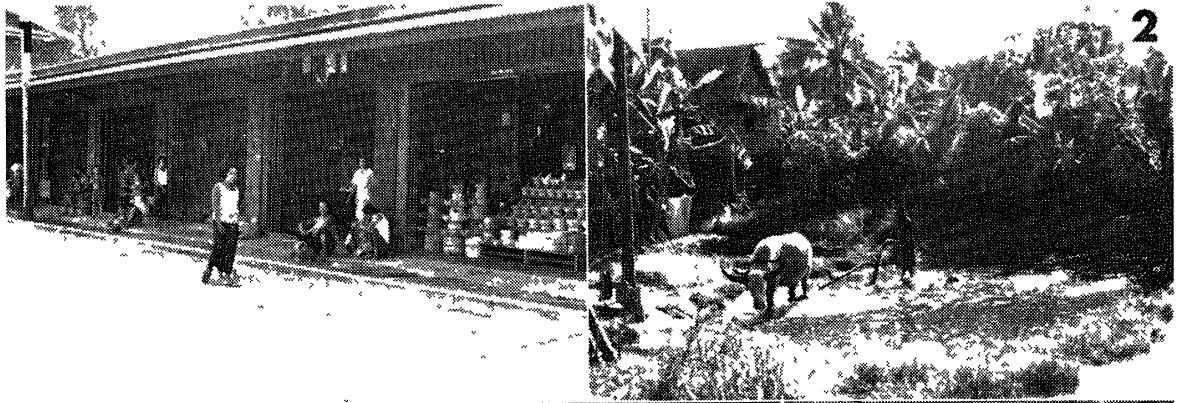
この Baram 河流域には、Iban, Kayan, Kenyah, Punan などの諸族が住んでいる。私は K. Bok の近くに住んでいる Iban 族（正確には Kayan 族かも知れない）を訪れた。このような奥地までやって来ると原住民はほとんど衣服をまとってもなく、女性も大半か下半身にサロンたけという姿である。南国へやって来ると大抵の原住民はブタとニワトリを飼っているか、ここでも多聞にもれず家の周辺を走り廻っている。軒下には頭蓋骨かふらさけてあり、やっと本物の原住民に会ったような気がした。今まで訪れた原住民の中では、最も近代文明の洗礼を受けてないようである。こんなところで、彼等の生活を調べたらいろいろ興味ある事実か判るのではないかと思われた。その上、彼等とてやはり稲作農民でもある点はさらに興味深いものがある。

#### 6. そ の 他

Malaysia の気候は雨期とのことであつたか、ここの雨期は雨か連日降るのでなく、大低夕方から夜半にかけて30分から1時間位のスコールか来るだけである。翌朝になるとカラリと晴れわたっているといった次第で私の行動には何の支障もなかった。Malaysia 国内は英語か非常によく通じ、何の不自由もなかった。ただ原住民を訪れるには現地語（マレー語あるいはそれぞれの種族の言葉）を話せるガイドなりを依頼しないことには通じない。中国人の進出のことは前にも述べたか、中国語かかなり通用することは特記しておく必要かある。食べ物も中国料理を中心かかなりのものかあり現地食をする限りては何の不自由もしないし、栄養も万点と

思われる。治安も非常によく、何処まで入って行っても何の心配もなかった。そして、Borneo という国は未知のものか多すぎて何から調査したらよいか判らない位興味深々たる何物かか隠されているようである。

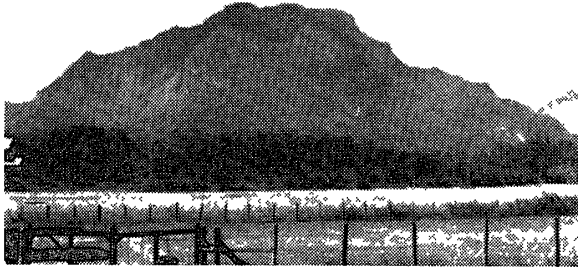
私の見聞したことを、急くままに雑然と筆を取ってきた。私の独断的な解釈をしてきたところもあったかも知れない。写真はモノクロームだけを使用した。他にカラースライドをかなり写してきており、収録したいものもあるか技術上からあきらめた。さらに、私の専門とする昆虫類についても多くの資料を持ち帰ったか、これについては稿をあらためて報告したい。



- 1 Bang Saen 付近の石細工の街  
(Thailand)
- 2 田園の風俗 (Thimland)
- 3 Tbai 武道 (Thimland)
- 4 古典舞踊 (Thimland)
- 5 民族舞踊 (Thimland)

- 6 米屋の店先, 右の人物は警官 (Fang)
- 7 道傍でのフタ肉の切り売り (Fang)
- 8 タバコや果物の売店 (Fang)
- 9 笹の葉に包んだお茶の葉, これを噛む  
(Chieng Dao)

10



14



11



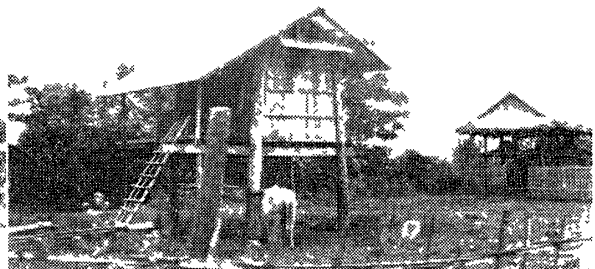
15



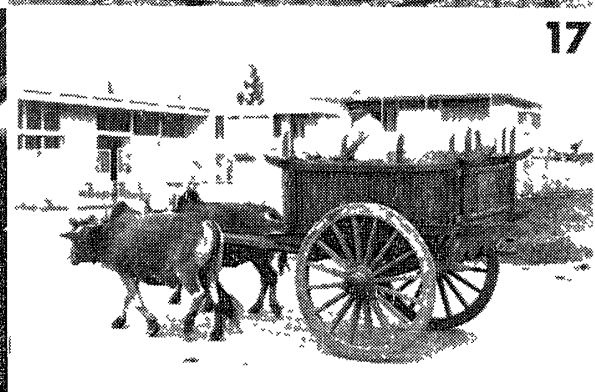
12



16



17



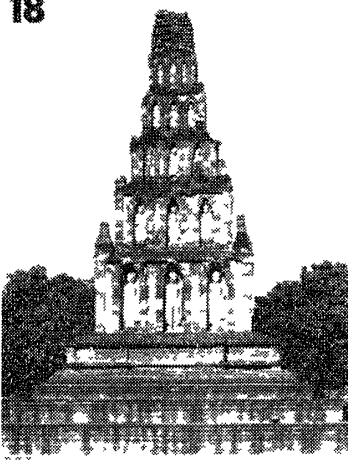
13

- 10 Chieng Dao 付近の山 (North Thai)
- 11 Chieng Dao の町 (North Thai)
- 12 Fang 近くの村 (North Thai)
- 13 Fang の街 (North Thai)
- 14 農家 (Fang)

- 15 町の裏通り (Fang)
- 16 農家の一角, 琉球にある高蔵に似ている (Fang)
- 17 コブ牛か引く牛車, 後方の建物は郵便局 (Fang)



18



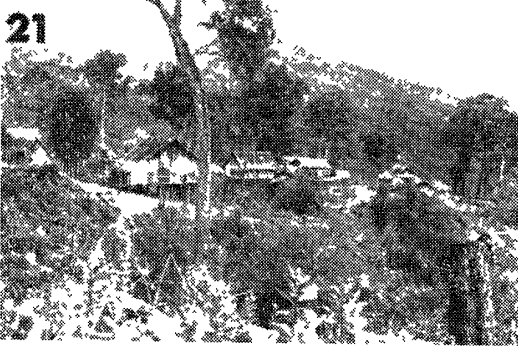
19



20



21



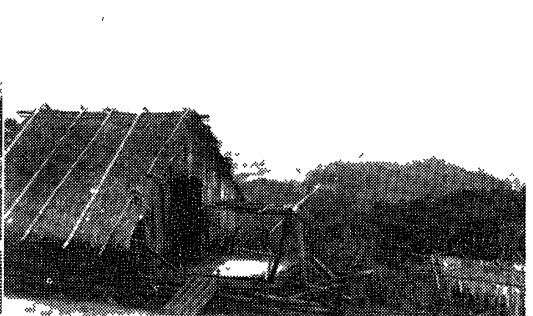
22



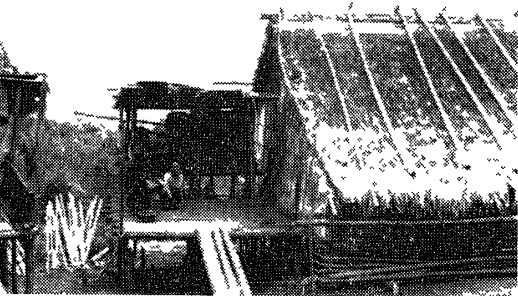
23



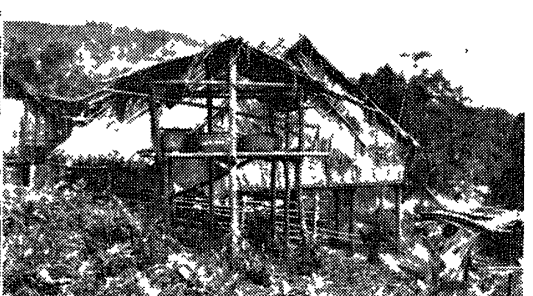
25



24



26



18~19 古い寺院の遺跡 (Chiang Mai)

20 Muhsur 族の少女 (North Thai)

21 Muhsur 族の部落 (North Thai)

22 Muhsur 族の陸稻栽培地 (North Thai)

23~26 Muhsur 族の住居 (North Thai)

27



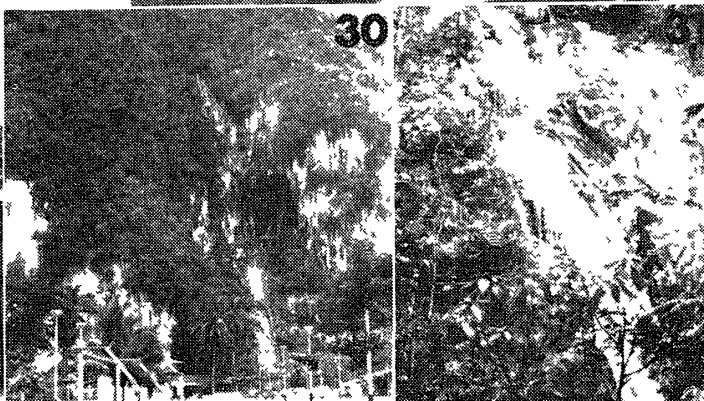
28



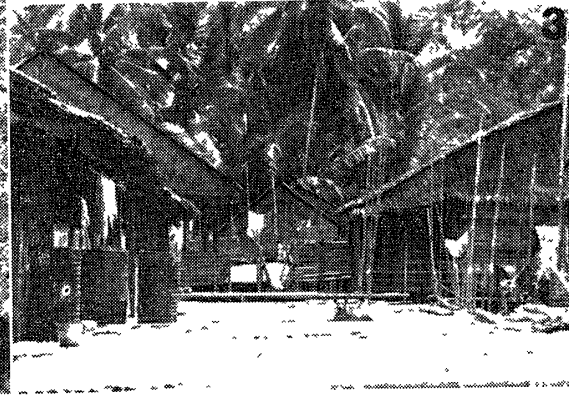
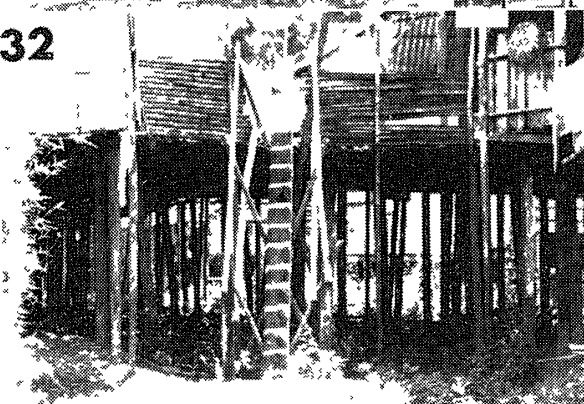
29



30

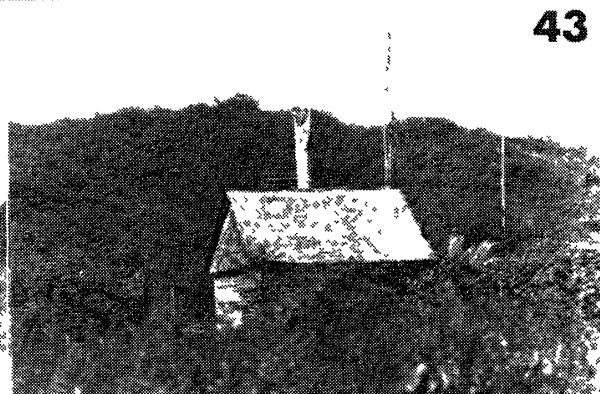
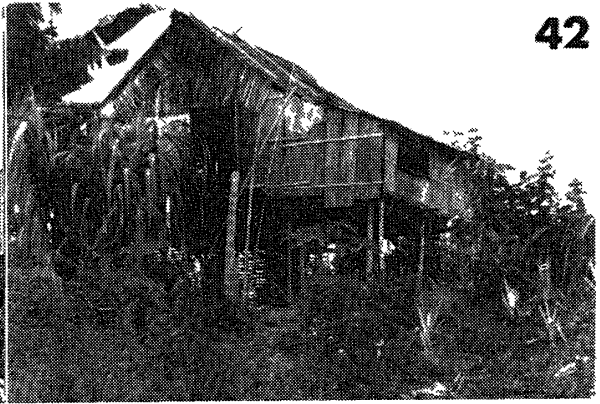
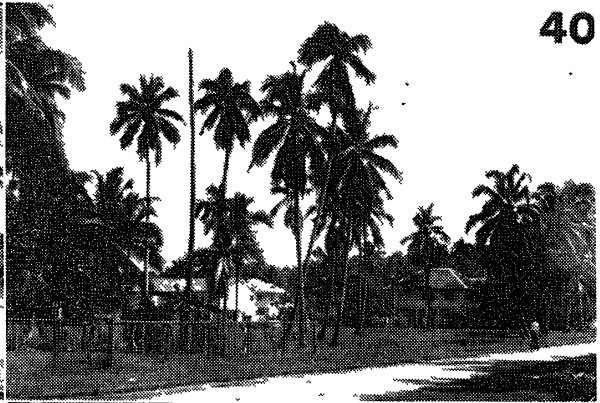
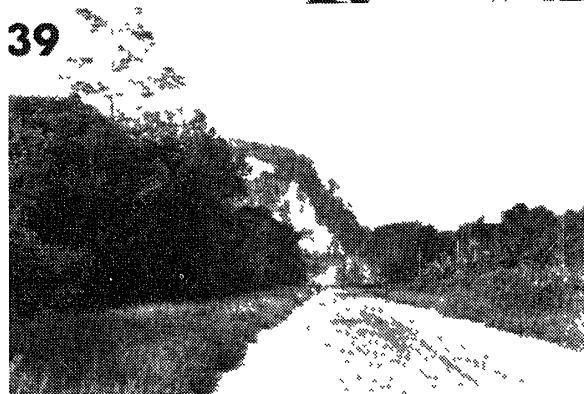
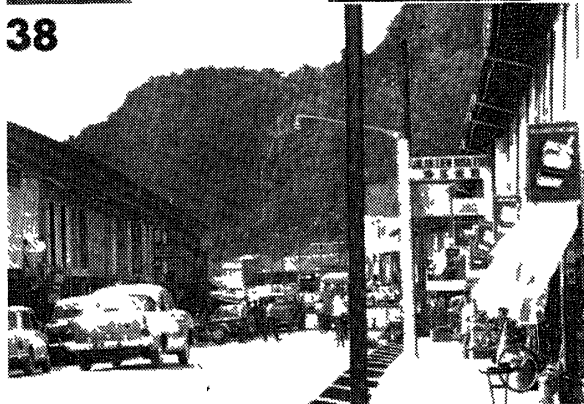


32



- 27 Kuala Lumpur 市内 (Malaysia)  
 28 Lake Garden, 中央の建物は国会議事  
 堂 (Kuala Lumpur)  
 29 食べ物屋 (Kuala Lumpur)  
 30 Batu 洞窟 (Kuala Lumpur)

- 31 シャングルの中の滝  
 (Cameron Highlands)  
 32 Dayak 族部落への上り口 (Sarawak)  
 33~35 Dayak 族の住居,  
 Long House (Sarawak)



36 Kuching の繁華街 (Sarawak)  
 37 Kuching 郊外の街 (Sarawak)  
 38 Bau の街 (Sarawak)  
 39 Kuching より Batu Kau へ至る道  
 (Sarawak)

40 Miri の住宅街 (Sarawak)  
 41 Miri の郊外 Batu Niah へ至る道路  
 (Sarawak)  
 42~43 原住民の家 (Miri-Batu Niah)

44



48



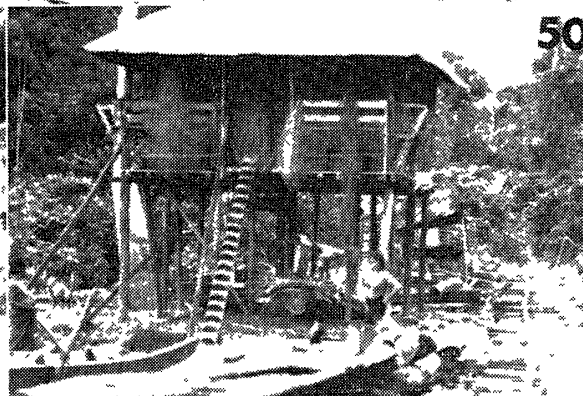
45



49



46



50



47



51

44 上空から見た Baram 河 (Sarawak)  
 45~47 原住民の家 (Baram 河)  
 48 水上の洗濯場および便所 (Baram 河)  
 49~50 Iban 族の部落 (Kuala Bok)  
 51 Iban 族の軒下につり下けてある頭蓋骨 (Kuala Bok)